

2 無形文化財・ 無形民俗文化財

長 沢 和 紙

舟形町指定文化財（昭和61年3月30日）

【所在地】 野 特産物センター

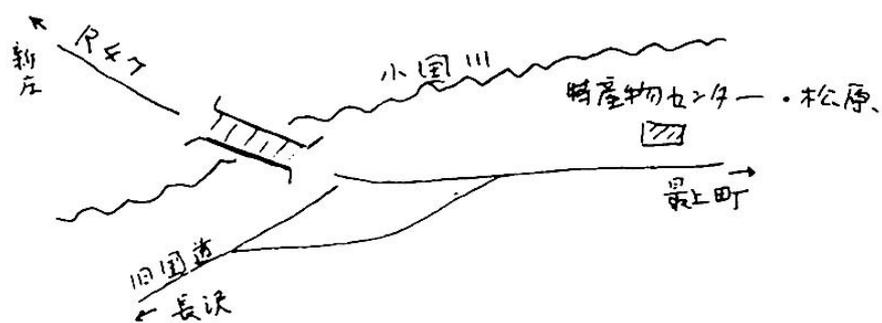
長沢和紙の起源については確かな文献もなく不詳であるが、長沢楯主長沢監物種祐の家臣鬼王、伊藤団三郎なるものが紙漉きの法を伝えたといわれている。戦後パルプの製紙により、昭和39年頃に途絶えてしまった。紙漉きを行っていたのは主に下長沢・楯・宿・下場・平石の農家であった。原料は楮（桑科植物）の皮で白皮を用いる。楮の原木をセイロで蒸して皮をはぐ。その皮を束ねて軒先に下げて干す。次に水に漬け、表皮と白皮をはぎ分ける。この白皮を半日程水に漬け、灰汁を入れて釜で煮る。皮が手でちぎれる程柔らかくなったらこれを清水に晒す。これを玉にして厚い板の上で、相打ちといって2人が向かい合って棒で叩き潰す。これを楮打ちといって夜なべに行う。こうして、綿のようになったものを厚い板で作った「フネ」という容器に入れ、かきませ、これにノリウツギの皮を煮て作った汁ネリを原材料の3割入れてさらによくかきませる。これを規格の寸法の簀をしいた木ワクで掬って和紙を作るのである。因みに長沢小調査書によれば、昭和7年頃の総生産高6,993帖、金額にして428円10銭になったという。昭和57年に町の勧めにより、町の特産づくりとして長沢の大場秀子氏が義母のフミ氏に習い、現在は「郷土特産物センター・松原」で和紙を漉いている。町内の小中学校の卒業証書に校章を、すかし入れ技法で漉きこんだり、また、和紙人形、新庄オンニョウジツコ穩明寺フミに使われたりしている。長沢和紙はメキシコ国際展に出品されたり（昭和62年1月『山形新聞』）、また、べに花国体賞状に利用されるなど、深山和紙と共に高い名声を博している。



大場 フミ さん



後継者 大場 秀子 さん



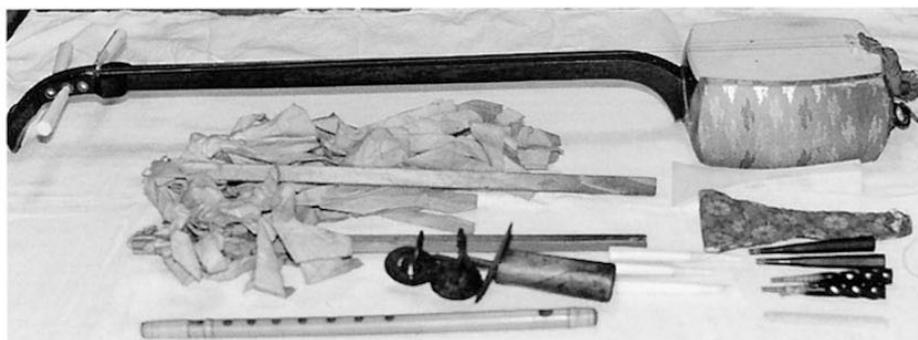
幅 カ グラ 神 楽

【所在地】 幅

確かな文献がないので起源は不明であるが、伝えによると、150年以前といわれる。豊作祈願の予祝行事と家内安全を目的として舞われた。大夫は岸家が勤め、総勢20人、旧正月2～3日各戸を廻ったり、旧4月15日に熊野神社に奉納したりした。又他村の祭礼に依頼され興業したりもしたが、昭和17年頃より芸能人の応召によって中断された。その後、岸今朝吉氏（昭和57年亡）によって昭和35年に復活されたが長続きせず、5～6年で下座取り（三味線・笛）の後継者がなくすたれた。岸氏はこれを惜しみ、幅地区の数名の人に獅子舞を伝授した。これらの人達は幅神楽愛好会を結成し、長沢小学校高学年に指導している。以前は七つ芸をもって幅神楽としたが、現在獅子舞のみ伝えられている。新暦6月15日、熊野神社祭礼に児童達が獅子舞を奉納している。また、舟形若鮎祭りなどでも一般公開されている。



左ホットコ面は、新庄住 野川陽山作と伝えられる



平成6年2月5日撮影 岸氏宅保存されている道具

堀内田植踊り

舟形町指定文化財（昭和47年4月1日指定）

【所在地】 堀内

この田植踊りは、約200年前頃から始まったといわれている。その頃、最上川舟運の水夫達は洪水や氷雪のため何日間も堀内に逗留^{トウリョウ}しなければならなかった。水夫達が退屈まぎれに堀内の若者と交わり、この踊りを教えたものが現在に伝えられているという。現在の踊りは当時とだいぶ異なるが、今の型は、小野重蔵という人が定めたといわれる。踊りは、踊り手4人と三味線、笛、太鼓、鉦、囃子^{ハヤシ}からなる。踊り手は馬の毛と金の輪で作られたものをテデ棒といい、これを振りながら踊るのである。馬の毛は早苗のたとえ、金の輪は馬のくつわを象徴したものといわれる。この田植踊りは、旧正月15～20日まで村内各戸を踊り歩き、豊作を祈願したといわれる。現在は民舞家木島静江氏によって堀内小学校児童に伝承され、舟形若鮎祭り、小学校文化祭で披露されている。昭和47年4月1日町指定。



平成8年度 若あゆ祭りに於いて、堀内小学校児童が披露

堀内田植踊り

田植踊り一行は踊り手4人、囃子4人、(それぞれ三味線、笛、太鼓、鉦をもつ) 歌い手2人、計10人の構成である。服装は田植の服装で法被にももひき、鉢巻姿で履物は、足袋に草履である。

踊り手はそれぞれ手に「テデ棒」を持つ。テデ棒は先端に馬の毛と鉄の輪をつけた棒で、踊るときはこれを振りながら踊る。馬の毛は、早苗を表し、鉄の輪は初駒のくつわを表すものとされている。

曲目は「正月」「四方かため」「あがりはか」の3曲からなる。一行は踊り手を先頭に各家を訪れる。各家の戸口をはいると踊りの一番手は独特の節回しで次の口上を述べる。「ハイごめんなされやお旦那様。四海波こそ静かにて国の治まる御祝、千秋万事まずもっておめでとうござる。」次に2番目の踊り手が、「この家のお旦那様には良き日に日取りをなされ、おかさく田作上々作がまさるよう、千秋万事まずもっておめでとうござる。」と口上を述べ、家の中にとびこむ。3番目の踊り手は「かや勝栗や御儀、重ね重ねの御祝、千秋万事まずもっておめでとうござる。」と口上を述べる。最後は(踊り手4人目)、「あのやん十郎をひきとって、隅から隅まですりい出す。なげればちゃんと立つ如く四すみにしかりど。」と「どん」とテデ棒を突く。ここで4人揃ったところをみて、踊り手一同4人で「春のはじめに初田植、いやまだまだハイドおもせ。」と述べる。次に歌い手に合わせて4人一線になり踊る。はじめに「正月」の唄。〽お庄屋の年の始めにお座敷みもせばにぎやかさよ。」を歌う。つづいて踊り手4人で四隅に向き合い、4人で順次、次の口上を述べる。「これより四方固めをしっかりと、田毎に並ぶ田植笠、いやまだまだハイドおもせ。」次に2番目の「四方がため」の唄に合わせて踊る。〽恵比寿・大黒・お田の神、七福神が舞い込んだそえ。口上「これよりあがりはかをしっかりと、あねさん餅の米なら白いほどいい。いやまだまだハイドおもせ。」3番目は「上りはかの唄。」〽これもあんまり植えれば腰が病み、おいとま申ぞご亭主様よ。最後の唄は夜上りの唄である。各家では米1升と餅7個位お礼としてさしあげる。(『舟形町史』より)。

堀内盆踊り

舟形町指定文化財（昭和62年6月20日指定）

【所在地】 堀内

この盆踊りは、本来は旧暦お盆の7月16日の夜に寺参りに行き、その折りに寺の境内で踊られ、またその帰りにも仲間と会うと群がって、あちこちの広場で夜更けまで踊ったものと伝えられている。現在は、毎年8月13日の夜に町立堀内小学校校庭を会場として踊られている。

この堀内盆踊りの起源や、伝播の経路については殆どあきらかではないが、室町時代に始まったとする説や、最上川舟運によって伝えられたという説もある。

盆踊りは元来、お盆の初めの日、祖先の霊を迎えるために、また、送り盆の16日に霊を送るために踊るものである。しかし、現在では、お盆に帰省した人の多くは15日に戻って行くので、8月13日に開催されている。

歌詞は、盆踊りの歌らしく艶っぽい歌詞が多く、それでこそ若い男女が胸躍らせて一晩中踊り明かしたとのことである。これが時代と共に芸能化し、華やかになってきたという。そのような中でも、堀内盆踊りは、他に例をみないほど古い形をそのまま継承している踊りと言える。特に所作や掛け声などが特徴的であり、文化財としての貴重な所以となっている。

以前は櫓も太鼓もなく、ただ歌い手と踊り手の下駄の響きだけで拍子をとっていたと伝えられている。現在のかたちになったのは、昭和40年頃であり、踊りの輪の中心に櫓を組み、その上で数人が太鼓を叩き、歌い手が盆踊りの歌を歌うのである。

踊り手の服装は浴衣の着流しで、下駄を履き頭に手拭をかぶるのが普通である。櫓を中心に輪を作るように並び、歌や太鼓にあわせて手足を振りながら踊り、前に進む。歌詞の節目で踊り手が大きな声で「ホーホ、ホッホッホッ」と掛け声を掛け拍子をとる。このとき両手を下からすくい上げるようにして前に押し出し、足を片方ずつ蹴り上げるようにして前に突き出す。この掛け声と手足の振りが他地区の盆踊りにはみられない特徴である。

この盆踊りが一緒になったものだという説もあるが、盆に迎えた先祖の霊を送る者と送られる精霊とが別れを惜しみ、互いに呼び合っている様を表しているのではないかという説もある。



平成11年10月16日～17日 国際民俗芸能フェスティバルに参加（於：青森県五所川原市）

平成6年2月1日県教育庁文化財課によって民俗芸能緊急調査の^{シツカイ}悉皆調査がなされた（担当溝口）。この折、採集された堀内盆踊りの歌詞は以下のものである。歌詞紹介者堀内矢作幸夫氏

堀内盆踊り唄

歌い手の歌詞はその場その場での即興的なものであり、数えられているもののみで優に100を越すといわれるが、教育的な配慮で23種が一般的に選定されているが、ここではあえて30種を紹介する。

1. 盆の十三日二度あるならば 裏の枯れ木に 花が咲く
2. 逢えばさほどの 用は無いか
逢わなきゃその日が 眠られぬ
3. 闇夜の鳥は 夜に迷うて泣く 私や貴方に 迷うて泣く
4. 夫婦約束 柿の木の下で なるもならぬも 波々と
5. 迷い過ぎたよ 後先みずに 女房子供の あるやつに
6. 惚れたお前に 手枕させて 夜明けまでよと 寝て見たい
7. 枕一つに 顔が二つ 布団ばけたか 足四本
8. 好きでかよわば 千里も一里 逢わず帰れば また千里
9. 泣いてすがるな ゆるすな心 蟬は泣き泣き 木を変える
10. 帰る足音 中ほどとまり
いつまた来るとのど すがりつく
11. 今夜これきり また明日の晩 語り残した こともある
12. お月様さえ 夜遊びなさる おらだするの 無理はない
13. 盆がきたきた 彼岸もきたし 縁で口開く 栗のえが
14. 千里奥山 ぶどうづるさえも 心ない木に からまらぬ
15. おもてきたかや うらからきたか
私しゅうらから 思ってきた
16. 雨のふる時きや 来るなとゆったけや
濡れたその衣装 どこで干す
17. 濡れたその衣装 寝すきの下で おれとお前の 熱で干す
18. 音がすれども 姿が見えぬ やぶの中では 音ばかり
19. なえだ三尺野郎 四尺の着物
足さふんごろまえて されころべ
20. 踊り踊らば 三十さかり 三十すぎれば 子が踊る
21. 顔見たばかりで 気がすむものか
酒呑みゃ樽見て 酔うものか
22. 木炭俵 元をただせば野山のすすき
月と遊んだ こともある
23. 盆の十六日 正月から待ってだ
待ってだかいもなく ただすぎた
24. ちょっと手をかけ また足をかけ
無理にわられた 栗のいが
25. 村の石橋 板橋ならば ドンと踏んでも さとるように
26. したい頃だよ させたい頃だ 親もさせたい 針仕事
27. にくいなじみと 爪けの石は
にくいながらも あとむずり
28. まだかまだかと 女房に聞けば
もすこしでよくなる 酒の畑
29. トントンと おりるはじごの まん中ごろで
いつまた逢えると 袖をひく
30. あまり長いと 見る人あきる
こころあたりで やめまする

